

『剣道の教え』

岐阜県

雙柳館 前一色道場

中学3年 中 島 章太郎

一昨年、僕は代表戦の開始線に立った。

僕が勝てる相手ではない。それでもここで負けるわけにはいかない。チームは負ける。とにかく相手の真っ直ぐで早い面を受けた。

何分経っただろうか。相手の面を受け続けた僕の肩は悲鳴を上げた。僕はワテンポ外して面を決めた。担ぎ面だ。

「勝った！」

試合の夜、いつもの様に道場に稽古に行った。いつもは試合の日なんて疲れ果て、道場への坂道を登るのが苦痛だった。でもこの日は違った。足取りは軽かった。道場の先生は今日試合を見に来て下さっていた。褒めていただけるに違いない。先生の顔を見るのがとても楽しみだった。

いつもの稽古をして、終わりの黙想。そして先生のお話があった。

「今日、章太郎の中学校が優勝した。大活躍だった。でも、あの面は打ったのではない、当たったんだ。」

僕は耳を疑った。さーっと血の気が引いた。僕のあの面が当たった？

僕のチームは勝った。何が悪いのかが分からなかった。大丈夫、僕の剣道を信じてこれからも頑張ろう。気持ちを立て直し、次の大会に進んだつもりだったが、いつもの気迫も実力も出せないままその年の中体連は終わってしまった。

一昨年、元横綱千代の富士がすい臓がんにより 61 歳で亡くなった。千代の富士は 15 歳の時に九重部屋に入門し、1970 年に初土俵を踏んだ。細見で小柄な体は肩の脱臼やケガに苦しんだ。上半身を鍛え、痛みに苦しみながらも大型力士を投げ飛ばす豪快な相撲が人気だった。努力と稽古の大横綱だった。競技は違っていても脱臼やケガが多い僕とは共通点が多く、憧れの存在だった。

テレビである評論家が言っていた。

「小さな体だが筋肉に芯が入っていて、投げ技を決めると土俵に稲妻がピカッと走ったように感じたものです。」と。

あの試合が重なった。あの時の先生の言葉がずっと引っかかり頭から離れなかった。あの担ぎ面は相手に対して精一杯の面だったのだろうか。ピカッと稲妻が走るような、人の心を動かせる面だったのだろうか。

小さい頃から大きな面に憧れて、僕なりに面を極めようと努力してきたはずだった。それが団体戦に出るようになり、勝つための剣道になっていた。小さい頃からの目標『勝

ち負けの関係ない僕の剣道』を忘れていた。あの時僕は体力の限界で早く決着をつけたかった。相手の真っ直ぐな剣道から逃げ、一步下がってから面を打った。それは真っ直ぐで捨て切った面ではなかった。先生から教わり、目指した剣道とは全く違っていた。

先生のおっしゃった言葉の意味を考えて稽古をする。素振りの時は左手を正中線から外さず竹刀を真っ直ぐ振ってみる。稽古の時には決して下がらず、自分から先を取り攻めてみる、そして打ち切る。相手を敬い、素直な剣道を心がける。

中学校最後の県大会、僕の心はなぜか落ち着いていた。もう逃げないと心に決めた。出来る限り稽古に通った事と、素振りを毎日続けた事は大きな自信につながっていた。

準々決勝、僕は相手の動きを読み、攻め続けた。前へ、前へ。小さな頃からずっと恐れていた面返し胴のことなんて忘れていた。

「今だ！」僕は精一杯、相手の心の真ん中に真っ直ぐ面を打ち込んだ。

.....。

旗は1本しか挙げがらなかった。それでも僕は決して後悔していない。この渾身で捨て切った面は僕がしてきた全てだった。

剣道は人間形成の道である。僕は剣道で自分の弱さを教わり、考える。そして竹刀に思いを込め、また稽古に励む。相手の心を打ち、人の心を動かす剣道を目指し、これからも稽古を続けていきたい。